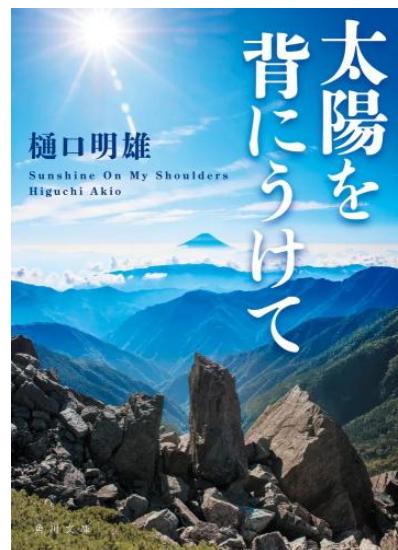


## 『太陽を背にうけて』（樋口明雄 著）

### 著者紹介

樋口明雄（ひぐちあきお）

1960年山口県生まれ。山梨県北杜市在住。雑誌記者、フリーライターを経て作家デビュー。2008年刊行の「約束の地」で09年に第27回日本冒険小説協会大賞と10年に第12回大藪春彦賞をダブル受賞、13年「ミッドナイト・ラン！」で第2回エキナカ書店大賞を受賞した。著書に「狼は瞑らない」「武装酒場」「風に吹かれて」など多数。近年、「南アルプス山岳救助隊K-9」シリーズが人気を博している。また、ノンフィクション作品として「北岳山小屋物語」や「のんではいけない」などがある。<著書カバーより>



それなりに山を扱った小説も多い。この本は読みやすい そのなかの一つだ。定年退職の日に離婚届を突きつけられるというよくある話である。誰もいなくなった部屋で酒浸りの日々。生きる目標もやることも何もない。そんな折 娘から電話で何か仕事をしたらと言われる。その言葉に心が動き仕事探し。しかし何も見つからない。65才という年齢もネックとなっているようだ。変わろうと断酒をした。

北岳山小屋の仕事の募集が目にとまる。高校・大学と登山部にいたことを思い出していたのだ。電話をしてみると 年齢も言ったはずだが相手は聞き取れず小屋まで来るようにとの返事があり 出向くことになる。日本第2位北岳を登り始めると急登が厳しい。ヘトヘトになりながらやっと登った北岳肩の小屋。管理者に会ってみると年とった姿を見て相手は呆然。電話が鮮明でなく、年齢がはっきりしなかったといい訳をいい、雇えないとの返答。そこへ管理者の父親が来て「一度、働いてみるかね」と愛の手を。とりあえず小屋で働くことになったが 経験もなく不器用で何もできないので四六時中怒られ続けである。そんなある日 小屋全館に響くような怒鳴り声があった。カレー鍋を焦げ付かせた騒動である。「カレーが焦げるから、ちゃんと見ていてください」と指示され 焦げるのを「ずっと見ていました」と。一事が万事である。それでも他に居場所がないと働き続ける。そんな姿に管理者の父親は

「何事も最初ってのはあるものだ」「・・・少しでも何かいいことを見つけたら、この仕事を続ければいい」「人生、何事もめぐり合わせの連続だからな」「もしうちに電話しなかったら・・・何か全く別のことをしていましたかもしれません」と。

何ヶ月も経ち、仕事にも慣れてきた。肩の小屋の名物メニューを提案した。北岳肩の小屋だから「肩ロースソテー」。前職のファミレスのマネジメントの経験を活かしてのものだった。またいつも怒鳴っている責任者が小屋の裏でギターを弾いているのを知り、話かけると打って変わっていい人でありギターを習うことになった。曲は当時練習していた「太陽を背にうけて」。

そんなあるとき 娘が北岳を登り小屋までやってきた。小屋にいても一度も登っていなかった北岳に娘と登る。登頂し「人生はめぐり合わせの連続」を実感し「やっとここまで来られたんだな」と涙ぐむ。同時に娘の目にも涙がたまっていることに初めて気付く。(いの)

太陽を背にうけて 2025年1月15日発行 株式会社KADOKAWA 940円（税別）